

5 今年度の重点課題（学校アクションプラン）

令和8年度 雄山高等学校アクションプラン			－ 1 －
重 点 項 目	（1 学習活動）学習活動		
重 点 課 題	教科指導方法の改善と基礎学力の定着・充実		
現 状	・与えられた課題に真面目に取り組んでいる生徒がいる一方で、自身の進路に対する具体的な目標を明確に持てていないため、学習意欲が低く、家庭学習時間が十分に確保できていない生徒もいる。また、予習・復習にかかる時間に個人差があり、基礎学力が十分に定着していない生徒が多い。 ・教員間での互見授業や生徒に対して授業アンケートを行い、校内外の教員や生徒からの評価をもとに、各教員で授業改善に取り組んでいる。		
達 成 目 標	①授業力の向上 ア 互見授業参加回数が年2回以上の教員の割合 イ 授業の工夫点や改善点の共有	②学習内容の定着、学習実態の改善 ア 学習内容を理解するために自分なりに工夫している生徒の割合 イ 学習にどのように取り組んだかの把握	
	ア：70%以上	ア：70%以上	
方 策	・互見授業を通して、個々の学力や進度に応じた教材について研究開発を進める。また、授業方法の改善や工夫に生かした点を共有し、授業力の向上に生かす。 ・ワークシート等を用いて、生徒の理解度を把握し、授業改善につなげる。 ・授業アンケート（7月・12月）を実施し、生徒の実態を把握する。 ・ICTの利用が適している場面では、積極的に活用し、理解や思考の深まりを促す。 ・授業アンケート（7月・12月）を実施し、生徒の学習における工夫点や実態を把握する。また記述式の設問を設定し、どのように学習に取り組んだかを具体的に把握し、改善点等を助言していく。 ・担任による個別面接等で生徒の学習の取り組み状況を把握し、進路目標と絡めて主体的に学ぶ意欲を喚起する。 ・具体的な進路目標をもたせられるよう学年や進路指導部と連携をし、自分に合った学習の進め方を考えさせ、計画的に学習に取り組ませる。		

（評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:あまり達成できなかった D:達成できなかった）

令和8年度 雄山高等学校アクションプラン			－ 2 －		
重 点 項 目	（2 学校生活）規範意識の向上と保健指導				
重 点 課 題	①遅刻者数の減少 ②スマートフォン等、端末機器の節度ある使用	防災意識を高める			
現 状	①R 7年度遅刻0回的人数（1/16現在） 1 学年 8 4名/1 1 1 名【75.6％】6回以上4名（3.6％） 2 学年 8 9名/1 1 5 名【77.3％】6回以上3名（2.6％） 3 学年 8 1名/1 0 0 名【8 1％】6回以上1名（1％） 全 体2 5 4名/3 2 6 名【77.9％】 ②端末機器の節度ある使用について ・1日（平日）の平均利用 3時間未満…5 0．9％（5時間以上1 5．1％） ※2時間未満…18％ ※前年度 3時間未満…42％（5時間以上18％） ・何時まで利用しているか？ 2 3時以降…5 0．8％（朝3時まで使用…3.7％） ※前年度23時以降…54％（朝3時まで使用…3％）	・能登半島地震では富山県も地震とは無縁ではないことを実感した。また近年、以前は考えられなかった自然災害も起こっている。昨年、地震や防災に関するアンケートやクイズを通し、8 1％が「防災意識が高まった」と答えたが、まだ実際の行動を想定していない生徒が多い。今年度の保健委員会でのアンケートでは、災害時に役立つ情報を知りたがっている生徒が多かった。			
達 成 目 標	①遅刻0回的人数割合 各学年全体の8 0％以上（1年72名以上、2年89名以上、3年92名以上）	③災害への備えに関する意識を高める。			
	②睡眠時間確保のため、23時以降使用しない。…70％	④災害への備えに関する知識を得て、身の安全を図れるようになる。			
方 策	①毎朝正門前に立ち、生徒への声かけや登校の様子等を観察するとともに、特に時間ぎりぎりに登校してくる生徒に対しては、声かけ指導及び各学年には教室前廊下に立っていただき、声かけ指導等を行ってもらう。また、遅刻2回の生徒に対しては学年と協力して面談等を実施し、原因を振り返らせるとともに、改善策を立て、生活習慣の見直しを促す。但し、遅刻や欠席の原因として、メンタル不調が認められる場合は保健厚生部と連携し、対応にあたることとする。 ②全校集会やHR、ネットラブル防止教室等を利用し、スマートフォンの正しい使い方や長時間使用による健康被害や危険性等について周知する。また、生徒会や風紀委員会にスマホ使用ルール等について話し合いを持ってもらうことで、スマートフォン等端末機器との向き合い方についての啓発活動につなげる。 アンケートを実施し、使用状況を確認する。			・アンケートを年2回実施し、自分の生活を振り返りかえることで、災害時への備えや行動について考える機会とする。 ・保健委員が、災害時の生活で知っていること役立つことを調べ、「保健だより」や生徒保健委員会で、I C T等を活用して情報を発信し、防災への知識や理解が深まるよう啓発する。また、万が一の時に実際に身の安全を図る行動をとれるような土壌作りをする。	

（評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:あまり達成できなかった D:達成できなかった）

令和８年度　　雄山高等学校アクションプラン		－ ３ －
重 点 項 目	(３ 進路支援) 希望する進路の実現に向かう力を育む	
重 点 課 題	進路意識の向上と進路支援の充実	
現 状	・社会とのかかわりの中で自己を見つめ、自らの進路を主体的に考えようという意識が希薄である。 ・進路実現に向け、向上心を持って粘り強く挑戦する姿勢が不十分な生徒が見られる。	
達 成 目 標	① 面談の充実 面談を通して「自己理解が深まった」、「自らの進路を主体的に考えるために役立った」と考える生徒の割合	② 自らの進路選択に対する満足度 卒業時に「自らの進路選択に満足している」と感じる生徒の割合
	8 0 %以上	8 0 %以上
方 策	・担任との面談の機会を重視し、進路希望調査、学習実態調査や成績、参加した行事の振り返り等を継続的、有機的に結びつける。 ・必要に応じて教科担当者との面談を設定するなど、生徒の自己理解を深めるために全教職員で連携する。 ・面談を重ねることにより、進路意識を向上させ、学習習慣の確立や生活習慣の改善を促し、自ら希望する進路の実現に向けて粘り強く挑戦する姿勢を育てる。	・総合的な探究の時間を有効に使い、進路ガイダンス、進路研修旅行、校外進路学習、職業人講話、企業見学、インターンシップなどを行うことにより、自己理解・社会理解を深めるようにする。 ・オープンキャンパス、学校説明会、職場見学など、生徒が自らの進路を主体的に考えるために必要な情報の収集ができる環境を整える。 ・一人一人の生徒の実態や希望を踏まえて、全教職員の理解と協力のもと、進路実現に向けて一斉指導や個別指導を行う。 ・資格取得に対する生徒の意識を高める。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:あまり達成できなかった D:達成できなかった)

令和８年度　雄山高等学校アクションプラン		－ ４ －
重 点 項 目	（４ 特別活動）特別活動および図書指導の充実	
重 点 課 題	ボランティア活動の充実および読書習慣の確立	
現 状	・生徒会主体の校内ボランティアや地域でのボランティア活動に参加する生徒が一定数おり、昨年のボランティア参加者のべ人数は、６１９人であった。 ・ボランティアに参加した生徒は、楽しさや気持ちの良さ、自分が学校や地域で役立っている喜びを感じており、また参加したいと感じている生徒が８７．６％いる。複数回参加する生徒もいるが、活動に消極的な生徒も４割以上いる。	・読書好きの生徒がいる一方で、全体として図書に対する興味・関心は低い傾向にある。そのため、ＨＲや授業での図書室の利用を除くと、自発的に図書室を利用するのは一部の特定の生徒である。昼休みや放課後に図書室を開放し、図書委員が中心となって図書の貸し出しを行っているが、昨年度の図書の貸し出しは一人平均１．７冊で、生徒全体には広がっていない。また、来館人数は自主学習の生徒を含めても一日平均１０．３人であった。
達 成 目 標	①校内外のボランティアに参加したのべ人数	②図書の貸し出し数
	６５０人以上	一人 平均２冊以上
方 策	・生徒会から、ポスターや校内放送で、どんな活動をするのかわかるように発信し、未経験の生徒にも見通しがもてるようにする。 ・ボランティアに参加してよかったという生徒の声を発信する。 ・これまでの活動を基本に、生徒会主体のボランティア活動を増やすなど、気軽に参加できるものを生徒会で企画する。 ・ボランティア活動参加人数の把握に加え、ボランティア活動に参加した感想をアンケート調査する。	・図書室の利用者総数とクラス別の図書貸出総数を掲示する。 ・図書委員会の活動の活性化を図り、図書委員のアイディアを積極的に生かし、図書選定を行ったり特集コーナーを設けたりし、読書の魅力をアピールする。 ・授業やＨＲでの図書室活用を促進し、読書へのきっかけを拡大していく。また資料となる書籍や検定・小論文対策の書籍・資料コーナーを充実させ、生徒が活用しやすいよう工夫する。 ・アンケートを実施し、図書室の利用や読書に対する意識の実態を把握し、意識の向上につなげる。

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:あまり達成できなかった D:達成できなかった)

令和8年度 雄山高等学校アクションプラン					－ 5 －	
重 点 項 目	(5 その他) 専門科目(家庭)の学習指導の充実					
重 点 課 題	専門科目の基礎的、基本的な知識と技術の習得を図るとともに、生活文化科での学びに対する達成感や充実感を高める。					
現 状	・ 家庭や地域における生活体験の希薄化により、家庭に関する基礎・基本からの学習が必要であり、自分に自信がなく、より専門的な資格取得に挑戦しようとする気持ちを持ってない生徒が増えている。					
達 成 目 標	①家庭科技術検定における合格率・取得率				②生活文化科での学びに対する満足度 1・2 学年は学年末、3 学年は卒業時にアンケートを実施する。 各学年の段階で生活文化科で学んで「よかった」と答えた生徒の割合 8 5 %以上 記述式項目で、専門科目の学習で身につけたことや成長したことを回答している生徒の割合 8 5 %以上	
			合格率 (受検者数に対する割合)	取得率 (在籍者数に対する割合)		
	3・2 級	食物調理 被服製作	100%	100%		
	準 1 級	食物調理 被服製作(洋服)	85%	85%		
		〃 (和服)	85%	48%		
	1 級	食物調理 被服製作(洋服)	80%	48%		
	〃 (和服)	80%	23%			
	※準 1 級(和服)、1 級は選択者が受検している。 ※前年度までの実績と今年度の生徒の実態をふまえ、検定ごとに目標を設定した。					
方 策	・ 家庭科技術検定合格に必要な学習指導、実技指導の工夫、徹底を図る。 ・ 生徒の実態を把握し、全体指導と個別指導を効果的に行う。				・ 専門科目全般の授業方法を工夫し、生徒が主体的に学習に取り組める環境づくりをする。 ・ ボランティア活動等体験的な活動への参加を促し、総合的な学習の充実を図る。	

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:あまり達成できなかった D:達成できなかった)